

新書 312

社会科学叢書

社会科学教育講座

統語的単位の開放性と参与の組織化(1)

—— 引き取りのシーケンス環境 ——

串 田 秀 也

社会科学教育講座

統語的単位の開放性と参与の組織化(1)

—— 引き取りのシーケンス環境 ——

くし だ しゅう や
串 田 秀 也

社会科教育講座

(平成13年7月25日 受付)

コミュニケーション研究者のあいだで、発話を文という統語的単位と同一視する考えや、文=発話をもっぱら話し手の意図・想定・思考が伝達されるための道具だとする考えが広く行き渡っている。本稿および続稿は、会話の中で生じる「引き取り」という現象の分析を通じて、以上の考えが一面的であることを例証し、発話が何ごとかを伝達しているだけでなくさまざまな利用を許容しているという視点が必要であることを主張する。本稿ではまず、会話の中で統語的単位がしばしば聞き手の参与に対して開かれた性質を帯びることを示し、それを可能にする契機をシーケンス環境に焦点を当てて分析する。

キーワード：会話分析，語用論，引き取り，参与

I はじめに

最近私は、会話の録音テープを書き起こしているときに、面白い体験をした。3人の女子学生の会話であったが、この3人はたまたま声がよく似ていた。その時点で彼女たちにまったく面識のなかった私は、書きおこしを始めてまもなく、どこからどこまでが一人の発話なのかを見極めるのがしばしば不可能だということがわかったのである。もちろん、発話の区切りがわかるところでも、それが3人のうち誰の発話なのかはまったく心もとないままであった。もし私が会話者の人数を予め知らされていなかったら、ここで何人が会話しているのかさえわからなかっただろう。

後日、私が書き起こしたものを会話者の一人に見せ、録音テープを聞きながらチェックしてもらった。案の定、私が単語の意味上のつながりや統語構造から推定した発話の区切りは、しばしば誤っていた。そして、区切りがあっていた場合でも、それが誰の発話なのかを取り違えていることはきわめて多かった。目の前でテープを聞きながら、私には何度聞いてもわからなかった部分を即座に識別しているその学生を見て、不思議な生き物を見ようような感覚におそわれた。

この経験が教えているのは、単語の意味上のつながりや統語構造といった手がかりが、発話と発話の境界を捉えるのに十分ではないということである。発話の境界は、会話している本人たちにとっては発話者の交替として容易に知覚される。しかしこの境界は、人が会話の現場から言語的テキストだけを抽出し、それらを「ひとまとまりの談話」と見なす位置に立つ限り、しばしば見失われてしまう。上の経験が示唆しているのは、発話と文を等置し、会話を談話と等置することが、ある基本的な限界を持つということである。

会話的コミュニケーションを談話の一種と見なす場合、そこで発話者が交替するという

現象は、文＝発話という単位が持つ統語的完結性の一つの帰結と見なされるだろう。一つの文＝発話が統語的に完結することによって「相手が反応しうるまとまった単位」が産出され、ゆえにそこで発話者が交替するのだと。しかし、実際の会話的コミュニケーションを理解するためには、この関係を逆転させなければならない。発話者が交替するからこそ、そこまでがひとつの発話として境界づけられるのである。かつて19世紀の言語学を回顧したバフチンは、「言語コミュニケーションの単位としての発話の詳細な理論を欠くために、文と発話の区別があいまいになり、しばしば両者はまったく混同される結果となっている」[バフチン 1988:142]と指摘した。この指摘は、それから1世紀近くを経た今日でも大勢において当てはまる。

本研究（本稿および続稿）¹¹の目的は、バフチンが求めたような発話の詳細な理論を組み立てるための一つのステップとして、会話における統語的単位の開放性と統語的単位への参与の組織化という主題に関わる一つのケーススタディを行うことである。具体的にここで対象とするのは、一人の発話が完結しうる地点を迎える前に、もう一人がその発話に統語的に連続するようにデザインされた発話を行う、という現象である。これを本研究では「引き取り」と呼ぶ。このようなことが、声のよく似た2人のあいだで行われたならば、その途中で発話者が交替しているということは音声だけを観察する部外者にはほとんど識別不可能となるのである。

今日、発話の詳細な理論にもっとも確実な土台を提供しているのは、会話分析である。本研究ではこの現象を会話分析の視点から分析することを通じて、次の二つのコミュニケーション論上の問題を考察することをめざしている。

第一に、今日の語用論研究の土台をなしている言語行為論、グライスの協調原則の理論、関連性理論などは、いずれも基本的に発話と文を同一視することの上に成り立っている。このような理論的前提のもとでは、文＝発話という統語的単位は話し手の意図によって統括された話し手の占有物と見なされてしまう¹²。しかし、文＝発話というものがそのような性格を帯びるとしたら、そのこと自体がまさに一つの語用論的ないしコミュニケーション論的現象ではないか。本研究は、文＝発話という統語的単位がつねに話し手に占有されたものであるわけではないこと、それが会話の中でしばしば聞き手の参与に対して開かれた特質を帯びることを示すことによって、統語的単位の有する性質自体がコミュニケーションの中で交渉され、変化しうるものであることを明らかにする。

第二に、従来の語用論におけるこのような視点は、文＝発話をもっぱら話し手の意図や想定や思考の伝達の道具と見なす「コミュニケーションの伝達モデル」[串田 1997b]の一つの現れである。この見方においては、言葉が社会的相互行為を組織化する媒体となるのは、もっぱら文＝発話が交換されることを通じて互いの意図・想定・思考が交換されるからだと考えられている。しかしながら、言葉は話し手の意図や思考といったものによって賦活されることによってはじめて相互行為の組織化の道具となるのだろうか。本研究は、言葉が言葉である限りにおいて備えている構造が、それ自体として相互行為の組織化のために利用可能であることを示すことによって、言葉と社会的相互行為とのかかわりをより開かれた視野から捉えようとする。またそれを通じて、発話が何かを伝達しているだけでなく、さまざまな利用を許容しているということ、すなわち「コミュニケーションにおける許容」という視角の必要性を論じることを狙いとする。

II 「許容されうること」としての引き取り

会話分析では、発話を文という統語論的単位と同一視することを避けるために、「ターン構成単位」という概念を用いる [Sacks et. al. 1974]。この概念の第一の特徴は、その単位性が当該の会話文脈を離れて一般的には定式化できないことである。このことが典型的に観察されるのは質問-応答などの「隣接ペア」の第二部分においてであり、たとえば、「今度はいつ会える?」「あさって」というやりとりにおいて、「あさって」という語は一語で一つのターン構成単位となる。ターン構成単位は、統語論的には文・節・句・語などさまざまなレベルにわたるのである。第二の特徴は、発話が生み出されている最中に、その単位のタイプとその完結可能点についての予測/計画 (projection) を可能にすることである。この予測/計画とは、単に認知的な意味で言われているのではない。現在の聞き手が次に発話を開始するとき、「なぜ今発話を開始するのか?」の規範的正当化を可能にするという意味で言われている。つまりターン構成単位とは、やりとりを規範的に説明可能な形で行うために利用可能なリソースである。

さて、この概念を用いて言い直すなら、本研究で注目する「引き取り」とは、一人が産出中のターン構成単位が完結可能点に達する前に、それに統語的に連続するようデザインされた発話が別の者によって開始される現象である。次のデータはその一例であり、「→」が「引き取られた発話」、「⇒」が「引き取った発話」である。なお、本研究で提示するデータでは、すべて「引き取られた者」をB、「引き取った者」をAと表記する。

【来る直前だもんね (Y1)】

- 1A : はー()張る前やこれ
 → 2B : そうだって()あたしあれやったのさー(0.6)
 ⇒ 3A : 来る直前だもんね
 4B : そうそうそう(0.7)このー(0.7)あと(0.4)ぐらい?
 5A : うん

Bが「あたしあれやったのさー」といって少し間を空けたあと、Aが「来る直前だもんね」と統語的に連続する発話を行っている。ここでAは、Bが産出し始めたターン構成単位が完結可能点に達するのを黙って待つことはしていない。Aはその続きであるような発話を自ら行うことで、その単位が自分に対していわば開かれたものであるようにふるまっている。他方、このAのふるまいを、Bの方も自分の占有物への不当な侵入と見なしている形跡はない。Bは「そうそうそう」とこのふるまいを承認しているようにみえる。こうしてここでは、2人がともに、Bが産出し始めたターン構成単位がAに対して開かれたものであるようにふるまっている。

このような現象は、発話と文を同一視した語用論的枠組みでは、当然ながらそもそも考察の対象とされていない。このやりとりを、従来の語用論的枠組みで解釈すればどうなるか。仮に、これを非明示的言語行為と考えるなら、この統語的に不完全な発話によってBはたとえば「あたしあれやったのさー、いつだったっけ?」という質問を意図したということになる。このような解釈をとる場合、不完全な統語構造の発話からただ一つの顕在的遂行文を導き出す規則を定式化するという途方もない課題を背負い込む。グライスの質の格率で考えたらどうか。Bは一見不十分な情報しか提供しないことにより、「それ以上

は思い出せない」ことを含意している、と。この場合、「あたしあれやったのさー」に続けてBが「来る直前だったもん」と言ったら、Bの発話は自己矛盾を起こしていると考えなければならないが、これはまったく奇妙な結論である。そして何よりも、これらの解釈では、Bの2行目の発話のあとでAがあいづちを打って続きを待つこともまったく適切な反応だ、ということの説明できない³⁾。

こうした困難が生じる原因は、何よりもこれを一つの伝達と捉えるところにあると思われる。従来の語用論研究は、多様な言語使用を伝達という枠組みの中で捉えようとした結果として、伝達という価値を担う単位である文や、それに伝達という価値を付与する原因としての意図を重視せざるをえなくなっている。しかし、「あたしあれやったのさー」といって一度間を空けたBは、そもそも何かを伝達したのだろうか。

より無理がないのは、ここではBの意図とは独立に、「自分が続きを言ってもいい」ということをAの方が見て取ったのだ、と考えることである。Aは何らかの形で、Bが継続中の発話産出に自分も参与することが許容されうると見なしたのだと思われる。引き取りという現象についてのこのような見方は、次のような会話的コミュニケーションについての基本的視点から生まれる。

会話的コミュニケーションを理解するうえで基本的には重要なのは、発話が「伝達していること」を考えるのと同じくらい重みで、発話が「許容していること」を考えることである。私たちは何ごとかを伝達しようという意図のもとにさまざまな発話を行うのであるが、同時に、その意図の実現に大きく抵触しない範囲で、さまざまなことを許容している。相手が新聞を読みながら話を聞いていること、近くにいる他人がさほど大きくない声でしゃべっていること、発話に向けていない第三者が途中で話に加わってくること、等々。会話とは、これら諸々の「許容されうること」が同時的・継起的に生じることで営まれる活動であって、決して「伝達しようと思図したこと」の交換としてのみ営まれるのではない。

話し手の意図とは異なる形で（あるいは意図を考慮することなく）発話を聞き手が利用するということは、これら「許容されうること」の重要な一部である。会話における発話連鎖の多くは、そのような先行発話の許容されうることの利用として作り出されると考えられるからである。これはデリダが言う発話の「コンテキストの接ぎ木可能性」、すなわちいかなる発話（正確には「マーク」）もその発信者の意図を中核として編成されるコンテキストとは別のコンテキストの中へ置き換えることが可能であるということ [デリダ 1988]、の一つの現れだといえる。しかしながら、原理的にはいかなるコンテキストの接ぎ木、いかなる先行発話の利用も可能であるにもかかわらず、実際には「許容されうることの限界」が確かに存在する⁴⁾。では、「許容されうること」を人々はいかなるリソースを用いてそのつど知るのだろうか。またいかにして「許容されうること」を実際に許容したりしなかったりするのだろうか。このような問いが、本研究で引き取りを分析する基本的問いとなる。

さて、引き取りという現象は、最初サックスによって注目され [Sacks 1992]、そのアイデアを展開する形でラーナーによって精力的に分析が進められた [Lerner 1991, 1993, 1996]。ラーナーと高木は英語と日本語の引き取りを比較研究しており [Lerner & Takagi 1999]、林もラーナーの影響のもとに日本語会話における引き取りの特徴を分析している [Hayashi 1997]。また、この動向とは独立に日本語学の分野では、水谷が日本語会話の特徴を「共話」と呼ぶ中でこの現象に注目している [水谷 1993, 1995]。さらに、アンタキらはラーナーの分析の限界を指摘しつつ、参与役割論を援用してさらなる記述を試みている [Antaki et al. 1996]。

このように、この現象についてはすでに一定の研究蓄積があるのだが、これらの研究者のあいだで扱っている現象の範囲に微妙な食い違いもある。後にデータをあげて行くにつれて明らかとなるが、この現象をどのように切り取るかは決して容易な問題ではない。現象の切り取りには、必然的にその研究者の問題関心や理論的視点が反映される。そこでまず、この点に言及しつつ本研究で扱う「引き取り」の範囲を明確にしておく。

サックスが最初この現象に注目するきっかけとなったのは、次のような会話である。

X : We were in an automobile discussion,
 Y : discussing the psychological motives for
 Z : drug racing on the streets.

ここではグループセラピーを受けている3人の少年が、新たにセラピー室に入室してきた少年に向けて3人でひとつの文を作り上げている。Yの発話とZの発話はいずれも先行発話に統語的に連続するようデザインされているが、二つの点で違いがある。第一に、発話の開始部に注目すれば、Yの発話は完結可能点に達した発話をさらに引き延ばすものであるのに対し、Zの発話は完結可能点に達していない発話の続きをいうものである。第二に、発話の終了部に注目すれば、Yの発話は完結可能点まで持っていかないものであるが、Zの発話は完結可能点まで持っていくものである。

開始部と終了部の特徴を組み合わせれば4通りの先行発話と統語的に連続した発話の類型が構成できる(下図)が、この4類型をどう捉えるかで立場が分かれる。

		開始部	続きをいう	引き延ばす
終了部	完了させる		A	B
	完了させない		C	D

ラーナーは、A類型、すなわち「共-参与者による完了(co-participants' completion)」のみを対象としている。アンタキらはより広く現象を切り取り、AとBの二つの類型を含めて分析を行っている。これに対し本研究で対象とするのは、さしあたりAとCの類型、すなわち、発話開始部が先行発話を統語的に引き継いでいるもののすべてである。「さしあたり」と述べたのは、次の理由による。水谷や林が指摘していることだが、日本語会話の特徴の一つとして、発話の完結可能点自体がしばしば不明確である。たとえば、「～けど」「～から」のような文末表現ではないものが、会話の中ではしばしば発話の完了部に使われうる。従って、日本語は少なくとも英語に比べて、ターン構成単位の完結可能点が不明瞭な言語である。それゆえ、上の表のAとBの区別、CとDの区別はそれほど画然としたものではあり得ない。

4つの類型はいずれも、発話のコンテキストの接ぎ木可能性の現れだと思わせる点で、最終的にはすべてを含めて論じるべきだと思われる⁵⁾。ただ、当面のところAとCの類型に注目するのは、本研究にとって、従来の語用論が照準する単位の途中で発話者が交替していることが戦略的に重要だからである。他方、本研究はこの現象を「ひとつの単位を二人で完成させる」ものとして捉えることも拒否する。これはサックスが用いたフレーズだ

が、ラーナーはさらに明確に、この現象を「二人でひとつのターンを完成させる」ものと捉えている。しかし、このように捉えた場合、それら二人の話し手のあいだの関係や産出される単位への二人の参与が単純化される危険がある。ラーナーがAのみに注目するのはこのようなスタンスからであり、本研究はこの点でラーナーとは袂を分かち。

本研究ではこの現象について、次の点に焦点を当てた分析を行う。第一に、産出中のターン構成単位を聞き手が引き取ることを可能にする契機は何だろうか。すなわち、聞き手が産出中のターン構成単位を自分の参与に対して開かれたものと見なすことを可能にするリソースは何だろうか（本稿）。第二に、産出中の発話を聞き手が引き取り始めたあと、両者のやりとりはどのような手続きに従って組織だてられるのか。聞き手が開かれたものと見なしたことに、話し手はどう対処するのか。そこで二人の参与はどのようなリソースを用いてどのように組織されるのか（続稿）。

以下、本稿の議論は次のように進む。3章では、引き取りについての記述枠組みを整備したラーナーの議論を批判的に検討しつつ、この現象を「コミュニケーションにおける許容」という観点から捉えていくための記述視点を提示する。4章では、筆者が収集したおよそ80の引き取りケースの分析を通じて⁶⁾、引き取りを可能にする典型的なシーケンス環境を析出し、そこから引き取りの働きについての仮説を提出する。5章では、以上の分析を例外的なケースと突き合わせてさらに検討する。

Ⅲ 統語的単位の開放性

1 予測可能性と進行性：ラーナーの記述視点

先に述べたように、ラーナーが対象としたのは「共一参加者による完了」という本研究よりも限定された対象である。しかし、本研究の分析対象はラーナーのそれと発話開始部の特徴を共有する。共一参加者が発話を完了させることを可能にする発話産出上の契機を「文法的単位の半透過性」という形で問題にした彼の分析は、もっとも重要な導きの糸となる。ラーナーは産出中のターン構成単位を共一参加者が完了させることを可能にする契機として、大きく二種類のものを見いだした [Lerner 1991, 1993, 1996, Lerner & Takagi 1999]。

第一群の契機は、「予測可能な」契機と総称され、その代表は「複合的ターン構成単位」と呼ばれるターン構成単位の一類型である。複合的ターン構成単位とは、たとえば「if A, then B」「because X, Y」のような二つの統語成分からなる形式を備えたターン構成単位であり、前半部分を「準備要素」、後半部分を「最終要素」と呼ぶ。このようなターン構成単位は、この単位全体の完結可能点がおとずれる前に、単位の内部において「準備要素の完結可能点」といういわばより小さな完結可能点を持つ。準備要素が発話されているとき、聞き手は、1. この準備要素の完結可能点はターン構成単位全体の完結可能点ではないことを予測でき、2. 準備要素が完了して最終要素が開始される時点を予測でき、3. 最終要素はどのような形式を備えたものになるかも予測できる。それゆえ聞き手は、準備要素の完結可能点が近づくと、「もうすぐこのターン構成単位全体が完了に向かう動きを始める」ことを期待できる。このような性格を備えた地点が、共一参加者による完了が適切に行われる契機となるという。

ラーナーは以上のような典型的な複合的ターン構成単位を定式化するとともに、その拡張形といえるいくつかの予測可能なターン構造をも指摘している。たとえば、「X said

Y」という引用の形式、挿入、リスト構造、「前置き+不同意」形式といった形式は、いずれもそのターン構成単位を「準備要素+最終要素」の形に構造化するものとされる。また、共一参与者による完了はしばしばターン構成単位の「最後のアイテム」においても生じるが、これも予測可能な契機の一つとされている。さらにラーナーは、ひとつのターン構成単位内部の構造化だけでなく、複数のターン構成単位を用いて作り出されるより大きな構成単位（たとえば、物語り）における構造化も共一参与者による完了のために利用可能であると指摘している。こうしてラーナーによれば、識別可能な完結可能点を持つ単位はみな区切られた行為スペースを投企し、それらは通常予測可能な準備要素の完結可能点をもつがゆえに、共一参与者による完了の契機として利用可能である。

これに対し「予測されない」契機と総称される第二群の契機は、発話の進行性がさまざまな形で滞る機会である。ラーナーは発話の進行性として二種類を区別している。一つは時間的な進行性であり、言葉が一定のリズムで切れ目なくつなげられながら発話が完結可能点まで進行していくことを意味する。話し手が発話の途中で笑いを挟んだり、音を引き延ばしたり、沈黙を挟んだりする場合、時間的進行性は滞る。もう一つは統語的進行性であり、一つ一つの語が統語的連続性を保ちつつ完結可能点に向けて進んでいくことを意味する。話し手が発話の途中で同じ語を繰り返したり、言いかけた語を中断して訂正するような場合、時間的進行性は維持されつつも統語的連続性は滞る。これらの進行性の滞りが生じる場合、産出中のターンを完結可能点まで持つていくことが話し手と聞き手双方にとって適切な活動となりうる。それゆえに、進行性の滞りが生じた地点は、共一参与者による完了が適切に行われる契機となるという。

以上の議論において重要なのは、産出中の統語的単位とは話し手がそれを話し終えるまで聞き手の関与を許さない占有物ではなく、かといってその産出中にいかなるコンテキストの接ぎ木も聞き手が自由に行きうるわけでもなく、統語的単位が聞き手による完了に対して開かれたものになるいくつかの限定された機会がある（「半透過性」）、ということである。これらの機会、発話を完了させるというターンテイキングに根ざした課題にとって、発話の統語構造のある側面が選択的に利用される（準備要素+最終要素という構造化に関わる限りでレリヴァントとなる）ことによって作り出されるのである。こうしてラーナーの分析は、ターンテイキングというすぐれて語用論的な問題にとって発話の統語構造がリソースとして立ち現れる一つの姿を明確にした。

2 ラーナーの記述視点の限界

ラーナーの記述視点は引き取りの契機を分析するという課題に対して確かな土台を提供しており、これら二種類の契機は私のデータ群にもほとんど当てはまるものである。しかしながら、なお以下の点において、ラーナーの立論は本研究の問題意識と本研究で扱うデータ群にとって不十分である。

第一に、引き取りをコンテキストの接ぎ木可能性という観点から考えている本研究にとって、ラーナーによる予測可能なターン構造についての議論は、まだこの可能性を狭く捉えているように見える。複合的ターン構成単位という概念に込められているのは、引き取りがひとつの統一体としてのターン構成単位の構造を予測することに基づくふるまいだという前提である。この前提は、「ひとつの文を二人で作る」という言い方の中に端的に現れている。しかし、引き取りというふるまいを行うために最低限必要なのは、語と語の連続性を作り出すことである。この連続性がつねに文ないしターン構成単位という上位の統一

体を共同で作りに上げることへの指向に貫かれていると最初から決めてかかる必要はない。むしろ、引き取りはそのような上位の統一体の産出可能性自体が交渉されうる機会だと考えられる。

第二に、ラーナーは「予測可能な」契機と「予測されない」契機を区別したが、このように相反する性格を持つ契機がどうして同じふるまいのために共に利用可能なのかが不明である。私の見るところ、この二つの契機を対照的な命名によって同じ平面上に並べるのはミスリーディングである。むしろ、前者は主として認知的予測可能性をもたらす契機であるのに対し、後者はターンの途中で聞き手が参入することを規範的に正当化する契機だと捉える方が、すっきりすると思う。こう捉えることにより、一方で、予測可能なターン構造を持たない引き取りにおいてどのような別の認知的リソースが利用されているのか、他方で、進行性の滞りなしに行われる引き取りにおいてどのような他の規範的正当化のリソースが利用されているのか、という問いを立てることができる。

第三に、ラーナーは複合的ターン構成単位をまずは統語構造によって特徴づけながら、これは統語構造によって決定されるものではなく、通常は複合的ターン構成単位を構成しないものでも「局所的条件によっては」複合的ターン構成単位になると論じる。このように拡大解釈していった場合、たしかに引き取りが生じている多くの発話において何らかの点で「準備要素+最終要素」という形に構造化された契機が見られる。しかし同時に、この概念そのものの記述上の有効性は低下する。なぜなら、引き取りが生じている発話に見られる構造がすなわち複合的ターン構成単位なのである、というトートロジーに陥りかねないからである。

第四に、ラーナーは引き取りが行われるターンの特徴だけに焦点を当てているために、「いつ引き取りが行われうるか」という問題を記述するのみで、「誰が引き取りを行いうるか」という問題を等閑視している。複合的ターン構成単位にせよ、進行性の滞りにせよ、それらは複数の聞き手にとって利用可能な契機である。

最後に、ラーナーの記述枠組みを日本語の会話に適用して検討した林は、次の3点を指摘している [Hayashi 1997]。1) 複合的ターン構成単位という形式は、日本語会話における完了の場合それほど突出した契機ではない。2) 大多数の完了は「最後のアイテム」、すなわちターン末尾に来る動詞や形容詞において生じる。3) 進行性の滞りと局所的に生じる構造（対照構造、リスト構造など）が発話の文法的構造と相まって、完了の可能性が高められている。これらの指摘はいずれも、私のデータ群にも当てはまるものである。ゆえに、われわれは、認知的予測可能性と規範的正当化可能性という二つの記述視点をラーナーから引き継ぎつつも、その日本語会話における現れをさらに探究する必要がある。

以上から、ラーナーが指摘した三種類の契機が引き取りの契機として利用可能となるのは「どのような場合に」「誰にとって」なのか、ということが残された問題である。この問いに答えていくための一つの方針は、当該発話の韻律的特徴やその他の音声上の特徴、およびそのときの参加者の視線の方向についての詳細な分析を行うことであろう¹⁾。しかし、ここでは別のアプローチをとりたい。私が収集したデータは、収録状態からいって韻律や視線の詳細な分析には限界がある。しかし逆に、収録設備に拘束されることなく、さまざまな場面（屋内・屋外）での会話が収録されており、行われている会話的行動の種類もかなり多様である。このようなデータの強みは、同じような統語構造ないしターン構造を有する発話であっても、あるいは同じような進行性の滞りを見せている発話であっても、それがどのような活動の中に位置づけられているかによって発話の「開放性＝半透過性」

のありようが異なってくるのではないかと、という問いを立てられることにある。会話の参与者は、個々の発話を独立したものとして聞いているのではなく、一連の発話を通じて行われる活動の一環として聞いているはずである以上、このようなアプローチは有効であり得る。

IV 引き取りの契機とシーケンス環境

引き取られる発話が埋め込まれた活動に目を向けるということは、すなわち、その発話がどのようなシーケンス環境の中のどのような位置におかれているかを観察することである³⁾。この点に注目して手元のデータ群を概観したところ、引き取られる発話はほとんどの場合、特定のシーケンス環境の中の限定された位置にあることが分かった。それらは、「理解の表示・チェック」「共同追加想起の促し」「現場コメント」「共通経験報告」「共同説明」「追加説明」という6種類である。

1 理解の表示・チェック

まず、ラーナーの記述がなお不十分なことを示すものとして、次のデータを詳しく検討したい。

【検査がはじまった(HO)】

- 1A: でこう先生の近くに寝てたんですよ
 2B: うん
 3A: でそのうちに(.)持ち物検査が始まった(0.4) [そりゃ(.)男女いる前(.)前=
 4B: [あっそんなんあるん?
 5A: =はじまったんですよ(.)僕は知らなかった [ん
 6B: [あっ(.)女子もいるまえ [で
 7A: [はい(0.8)
 → 8B: あー持ち物 [検査で エロ本が見つかってしまう(0.7)
 ⇒ 9A: [検査がはじまった
 10A: エーロ本が見つかってしまうっ

男子学生Aは、自分が高校のキャンプのときにエロ本を隠し持っていったら、自分が寝ているあいだに女子もいる前で持ち物検査が始まってしまい、窮地に陥ったことがあるという物語りを行っている。聴き手Bが8行目で「あー持ち物」という言葉で発話を開始すると、Aは間髪を入れず「検査が始まった」と引き取り、その統語的単位を完了させている。

この引き取りはラーナーが指摘した2種類の契機のいずれをも持たないように見える。Bの発話は複合的ターン構成単位ではないし、これはターン構成単位の最後のアイテムの引き取りでもない。引き取られているのは上部をなす名詞句の途中からである。また、このケースにおいてBの発話は引き取られるまでの部分で何の進行性の滞りも示していない。

このようなケースをも記述するためには、二つの間に答えなければならない。第一に、AがBの発話の続きになりうる言葉を「検査が始まった」と予測するに当たって、どのような契機が利用可能であったのか。第二に、Aがここで引き取りを行うことはいかにして

規範的に正当化されうるのか。

第一の間について、手がかりを見つけないのは困難ではない。「持ち物検査」という言葉は、これに先立つ物語りですでにA自身が発話したものである（3行目）。Aの引き取りが開始されている地点は、「すでに誰かが発話した言葉の反復＝引用」が今行われようとしていること、このことが観察可能になる地点である。このきわめて強力でありうる契機は、少なからぬ引き取りケースに見られるのであるが、ひとつのターン構成単位の構造のみに注目しているラーナーの記述視点からは、完全に抜け落ちている。

ただ、「すでに誰かが発話した言葉」というのは会話の中に満ちあふれている。なぜこの場合に、そのことが特別な意味を持つのか。実はこれを考えることが、同時に第二の間に答えることにもなる。

Aがしばらく前から行っている物語りは、「で、そのうちに持ち物検査が始まった」という部分でクライマックスにさしかかっている。つまり「女子生徒もいる前でAがエロ本を持ってきたことが暴露されてしまう」というのがその内容である。しかし、ここにさしかかったとき、Bは最初、クライマックスにふさわしい反応をしない。「あっそんなんあるん？」という反応は、直前のAの発話がクライマックスという価値を担わされていることをBが捉え損なっていることを示している。そして、「あっ女子もいる前で」「あー持ち物」と続くBの発話は、Bがクライマックスの聴き手として自分の状態を整えていく作業をなしている。Bは「あっ女子もいる前で」という発話で「あ+Aがすでにいったことの言い直し」という形式を踏んでおり、その後で「あー持ち物」と始めるとき、AはBが引きつづきAの言葉を採用して自分の理解を示すものと観察できる。

さらに精密な構造がここにはある。Bによる連続した理解の表示が、A自身の語りの順序とは逆転していることである。Aはまず「持ち物検査が始まった」ことを述べ、次いで「男女いる前」であったことを補足している。これに対しBは、後者に対する理解を先に表示している。シュゲロフが指摘したように、この逆転した順序は、そのシークエンスが上位のシークエンスに対する「挿入的活動」であることを示す典型的な手続きである [Schegloff 1972]。この順番の逆転ゆえに、Bが「あー持ち物」と始めるとき、AはBが最初に躓いた地点に今や立ち戻ることで理解を示す活動を終了しようとしていることを観察できる。

要するに、「持ち物検査」という言葉は単なる「すでに誰かが発した言葉」の一つではないのである。それは、BがAの発話を捉え損なうことで物語りの進行性を滞らせた、その当の発話で用いられていた言葉（＝トラブルソース [Schegloff et.al. 1990]）である。そして今、Bがやっている理解の表示は、そのトラブルソースまでいわば時計の針を戻すことで、失われていた進行性を回復する活動である。失われていた進行性、それはAの物語りの進行性である。それゆえ、この進行性回復活動が終局を迎えることは、Aが物語りを再開することを適切にする。ここでAはこの発話の続きを認知的に予測可能なだけでなく、それを発話することが規範的正当性を持ちうるのである。

以上のように、このケースでは引き取られているターン構成単位そのものには予測可能な契機も進行性の滞りも見られないが、このターンが位置づけられているシークエンス環境の中で認知的予測可能性と規範的正当化可能性が与えられている。このことは、予測可能性と進行性というラーナーの着眼点の有効性を裏づけるとともに、それらをシークエンス環境を視野に入れて捉え直すという作業の有効性も示している。

引き取りの第一のタイプのシークエンス環境は次のように定式化できる。

A : 「理解の対象となる発話」 — B : 「理解の表示・チェック」
 ↑
 A : 引き取り

次のケースは、上のケースと同様の構造が、ひとつのターンの中に含まれている例である。

【イギリスロック (YS)】

- 1A : 私はブリティッシュが好きなのーってゆって
- 2C : んっふっふ(1.8)
- 3A : でもいちばん好きなのはスウェーデンやけど(0.9)
- 4B : ふーん(.)えっんじゃあイギリス(0.5)どっちかっていえば — イギリスのー
- 5A : — イギリスロック(.) うん(.)
- 6 ロックが好き
- 7B : うんあーあ(.)へえー

Aが自分の音楽の好みについて報告すると(1-3行目)、Bは4行目でまず「ふーん」という。この反応は、理解したかどうか曖昧であり、仮に理解しているとしてもそれを弱く「主張」しているだけで「表示」してはいない。しかし、続いてBが「えっんじゃあ」というとき、これはAの報告に対してBが理解を表示する作業の前置きとして観察可能である。直後にBは「イギリ」と言いかけて自ら中断し(修復の自己開始)、短い沈黙をはさむという進行性の滞りを見せる。そこで、続く「どっちかっていえば」が発話されるとき、聴き手はこれを自己修復の実行準備だと聞くことができる。この直後にAは「イギリスロック(ク)」という言葉を引き取っている。上のケースと違い、「イギリス」という言葉そのものをAは先行部分で発話してはいないが、「ブリティッシュ」という言葉を報告に用いている。

2ケースに共通してみられるのは、引き取られている発話に「これから自分があなたの発話をどのように理解したかを述べる」ということを知らせる前置き標識がおかれることである。ヘリテイジの議論を参照するなら、【検査がはじまった】の場合の「あー」は確信を込めた「理解の表示」の標識、【イギリスロック】の場合の「えっんじゃあ」は不確かさを含んだ「理解のチェック」の標識ということになる[Heritage 1984]。そして、理解のチェックを行うことは理解の不確かさを表示するから、それ自身としてシークエンスレベルでの進行性の滞りを意味している。他方、次のケースは理解のチェック標識が最後に来る場合である。

【朝ご飯に食べるやつ (KS)】

- 1A : Bちゃん何座?(0.6)
- 2B : おひつじ座(6.6)
- 3A : フランクバーガーがいいねんでラッキー — フード
- 4B : — ふーん(.)フランクバーガー(.)ってきー
- 5A : 朝ご飯に食べる — やつ
- 6B : — 朝ご飯のやつやん — なー
- 7A : — んー

ここではAが雑誌の星座占いのページを見ながら、会話に参加している。AはBの星座が「おひつじ座」であることを確認（1-2行目）したあとで、おひつじ座の「ラッキーフード」が「フランクバーガー」だと雑誌に書いてあることをBに知らせる（3行目）。この「ニュース告知」を聞いたBは、先ほどと同様、まず「ふーん」といって理解を弱く主張するだけである。しかし、続いて発話された「フランクバーガーってさー」の最後の「ってさー」という標識は、続く部分で話し手が理解のチェックを行おうとしていることを観察可能にする（4行目）。

以上のようにこれらのケースでは、当該発話の引き取られる前の部分において、その発話で行われようとしていることが「理解すること」であることが示されている。そしてこれによって、その発話は「理解することを知らせる成分+理解の内容を提示する成分」という構造を持つものとして、聞き手によって利用可能となっている。それゆえ、拡大解釈を行えば、ここにも「準備要素+最終要素」という構造化が見られるといえなくはない。ただ、重要なことは、このような構造化は、その発話が理解の表示・チェックというシークエンス環境に位置づけられ、それと相互参照的な関係を作り出すことで生じるのだということである。ターンの持つ構造とはそのターンそのもののデザインのみによって決定されるのではなく、それが位置づけられるシークエンス環境の中で構造化される。われわれは以下の議論においても同様に、引き取りの対象となるターンが、然るべきシークエンス環境の中に位置づけられることによって一定の構造化を引き受けることを見るだろう。

2 共同追加想起の促し

第二のシークエンス環境は、過去に共に参与したある出来事を一人が想起したことが表示ないし主張されたあとで、もう一人がその出来事についてさらなる追加的な想起を行うというものである。この追加想起を行う発話は、相手がその出来事を「知っているはず」であることに指向した発話デザインで行われ、想起が「共同で」行われることを促しているものと聞くことが可能になっている。

【来る直前だもんね（Y1）】

- 1A：はー(.)張る前やこれ
 → 2B：そうだって(.)あたしあれやったのさー(0.6)
 ⇒ 3A：来る直前だもんね
 4B：そうそうそう(0.7)このー(0.7)あと(0.4)ぐらい？
 5A：うん

3人の女子学生が、数ヶ月前にBの部屋で自分たちの会話を録画したビデオを見ながら会話している。Bはこのビデオを収録した後に部屋の模様替えをして部屋の中に幕を張っており、このことは他の二人も知っている。ここでは、このビデオを収録したのがいつ頃だったかが話題となっており、その中でAは「はー、張る前やこれ」とその時期を想起する（1行目）。「これ」というのがビデオを収録したことであることはここまでの会話文脈から自明である。

Aがこうして「ビデオを収録した時期」を想起したあと、Bが「そうだって、あたしあれやったのさー」と始めるとき（2行目）、AはBが「あれ」ということばで「自分の部屋に幕を張ったこと」に言及し、それを手がかりとして「ビデオを収録した時期」を想起

していることを観察可能である。そして、Bが「さー」までいって沈黙をはさむとき、この進行性の滞りは「すでに想起を示した者」であるAが続きを引き取って発話する機会を与えている。

【あのレストランから雪渓みたんか (SK)】

- 1A : えーロープウェイなんか乗ったんだっけ? あのと(0.8)
- 2D : んん [ー?]
- 3C : [みんな] [なで乗ったやん(.)] 写真撮っ [た]
- 4B : [乗ったでしょ] [乗ってほら(.)] 写真写したでしょ
- 5A : そーやった
- 6B : で [あそこの(0.7)あの一] [ーリフトには乗らなかったけど]
- 7D : [(……)]
- 8A : [あーそっか]
- 9C : んーふん
- 10B : ロープウェイであそこまで行って [ー] [そのうえにい]
- ⇒11A : [あのレストランから(0.5)]
- 12B : そうそうそう
- ⇒13A : 雪渓見たんか
- 14B : そーだね

親族の食事場面である。会話者たちが1年ほど前に谷川岳に旅行に行ったことが話題になっている。Aが1行目で「えーロープウェイなんか乗ったんだっけ、あのと」と発話するとき、Aがこの出来事を想起していることが表示されているとともに、その一部について想起を共有していないことが示されている。CとBがその出来事を詳しく述べるのを聞いて(3-4行目)、Aは「あーそっか」と自分が想起を共有したことを主張する(8行目)。このあとでさらに、Bが想起を続けた発話で「行ってー」と音を引き延ばすとき(10行目)、この進行性の滞りは「すでに想起を主張した者」であるAが、今度はそれを「立証」する機会を与えている(11~13行目)。

二つのケースにおいて、引き取られる発話を行っている者は、自分が「相手も知っているはずのこと」を想起しているのだということが観察可能になるような発話デザインを用いている(「あれやったのさー」「あそこまでいって」)。このことは、相手はその前に出来事(の一部)の想起を表示・主張したことが発話の組み立てに利用されていることを示す。引き取りが行われているのは、こうした「共同参与した出来事の想起であることを知らせる成分」のあとである。

以上のようなシーケンス環境を、次のように定式化することができる。



3 現場コメント

相互行為の現場においてたった今共に参与した出来事について、その直後に何らかのこ

メントが行われるとき、そのコメントはしばしば引き取りの対象となる。このような発話は、しばしば現場指示的(deixic)な指示詞と評価的なコメントを含んでいる。

【食べちゃったねー (SK)】

- 1B: Yのまだある〔ん(だよ)
 2A: 〔Yちゃんいっぱいあるよー(.)ごはん
 3B: Yのいっぱいあるよまだ(1.1)
 4A: ね?
 → 5B: 結局このトマトほとんど(0.4)〔食べたねー 〔うん(0.7)まるまる
 ⇒ 6A: 〔食べちゃったねー

親族が集まって食事をしている場面で、Bがご飯をお代わりしようとする、Bの2歳の息子のYが「いらん」といった(トランスクリプトの直前)。それを見てBは、息子がお父様のご飯を自分のご飯だと取り違えたものと解釈し、Yのご飯はまだお椀の中に残っていることを指摘する(1行目)。Aも横からYに向かって、まだYのご飯はいっぱいあると指摘する(2行目)。このようにBとAがいわば「チーム」をなして、Yが自分のご飯を食べてしまうように促した(1-4行目)あとで、Bはトマトがのっているお皿を指さしながら「結局このトマトほとんど」という(5行目)。

この発話は、たった今ここで生じた出来事(もうご飯はいらぬというYに対して、BとAがご飯を食べよう促したこと)に対する、ひとつのコメントを開始しているものとして観察可能である。つまり、「Yはお皿のトマトをほとんど一人で平らげてしまったので、もうお腹がいっぱいなのであろう」と。そして、Bとともにご飯が「まだ～ある」と指摘したAは、Bが「ほとんど」までいって沈黙をはさむとき、この進行性の滞りを自分の引き取りの契機として利用可能である。

【おんなじこと言って (SK)】

- 1C: おねんねする?(0.9)
 → 2B: すごいねみんな5人ぐ〔らいでなんか
 3Y: 〔やむやむやむ 〔――
 ⇒ 4A: 〔おんなじこと 〔言って
 5B: 〔「おhひるhねhおhひるhねhおhひるhねhー」っへっへー

トランスクリプトの直前で、その場にいた幼児Yがむずかったのを見て、会話者全員が立て続けに昼寝をするよう幼児に勧めた(1行目のCの発話はその最後である)。いわば、「うるさい子供」を寝かせることで大人同士の会話をじゃまされずに行おうとする「大人たちの共謀」といえる出来事である。この直後に、幼児の母親であるBが「すごいねみんな5人ぐらいでなんか」というとき(2行目)、それはたった今自分も含めて行われた「大人たちの共謀」の露骨さに対するコメントを行っているものとして観察可能である。そして、この発話を「同じことって」と引き取っているAは、この幼児の父親である(4行目)。二人は、ともに「親」でありながらたった今この露骨な共謀に参与したことに、いわば自虐的にコメントしているのである。そして、Bの発話が「なんか」という言葉に

よって統語的な進行性の滞りを見せたことが、Aによる引き取りの機会となっている。

以上のようなシーケンス環境は、次のように定式化できる。

A, B : 「現場の出来事への共同参与」 — B : 「出来事へのコメント」
 ↑
 A : 引き取り

4 共通経験報告

「共通経験報告」とは、一人が自分の経験を報告したあとで、もう一人が自分にも共通の経験があることを報告する、という形式である。この第二の報告が引き取りの対象となる。なお、これは私が別の機会に「私は—私は連鎖」と呼んだやりとりの形式の一種である [串田 2001]。

【食べれなくなる (Y1)】

1C : すごいなあ
 2B : すごいね [やっぱ(0.4)胃の大ききさゆえ?(0.6)
 3A : [ん—
 4A : だと思っね(.)ちっちゃかったから—ストレスとかたまと—入んなかったんじ
 5 [ゃない?
 6B : あたし—(0.6)うんそ— [だね
 7A : [うん(1.5)
 8A : [だめ
 9B : [あたしも入んないよストレス—が
 →10 (0.5)たまる—とぜんぜん(.)ご [はんなんぞいらん
 ⇒11A : [食べれなくなる(.)うん

中国に旅行に行って帰ってきたAは、旅行中に食道楽をしたため以前よりも食欲旺盛になったということをお話す(トランスクリプトの直前)。それを聞いたCとBは「すごいなあ」「すごいね」と評価し(1-2行目)、そのあと旅行以前の自分は小食だったという経験を話したAの発言(4-5行目)を受けて、Bは自分も同様に「ストレスがたまると」食欲がなくなるという共通の類型的経験を報告する(6-10行目)。Bが「あたしも入んないよ」と共通性を主張しつつ発言を始め、「ストレス—が、たまると」とAの先ほどの言葉を採用して続けるとき、AにはBがその主張された共通の経験についてさらに報告を行うことが観察可能である。

ここで付言するなら、「ストレス—がたまると」というのは典型的な複合的ターン構成単位の準備要素(「if節」)であるが、Aはこの直後ではなく、Bが「ぜんぜん」と言って短い間を挟んだあとで、「食べれなくなる」と引き取っている。林は、日本語会話の場合、複合的ターン構成単位の準備要素の直後で行われる引き取りは少なく、そこに音の引き延ばしや沈黙などの進行性の滞りが付加されたあとで引き取りが開始される傾向が強いことを指摘している [Hayashi 1997]。この指摘は私のデータ群にも基本的に当てはまり、このケースの場合も「ぜんぜん」のあとに短い沈黙があるが、それだけではない。先の【イギリスロック】【食べちゃったね—】も合わせて考えるなら、日本語会話の場合、「どち

らかといえは「ぜんぜん」「ほとんど」のような程度を示す連用修飾語は、それ自体として引き取りのための統語的リソースになっていると思われる。これは、ターンの完了点が間近いことを知るための強力なリソースとして程度を示す連用修飾語が利用可能だからだと思われる。

このシーケンス環境は次のように定式化できる。

A : 「経験の自己報告」 - B : 「共通経験の自己報告」
 ↑
 A : 引き取り

5 共同説明

共同説明とは、ラーナー&高木も詳しく検討しているシーケンス環境である [Lerner & Takagi 1999]。これは、複数の参加者が何ごとかについて共有知識を持つことが示されたあとで、その知識を共有しない別の参加者に向けて説明が行われるというシーケンス環境である。これは、サックスが「配偶者トーク」と呼ぶものの一種である [Sacks 1992]。

【してるだけ (SK)】

1C : あーおいしいねこのモロヘイヤってね(.)てんぶらにすると(0.9)
 2B : てんぶらは合いそうだなあ
 3A : んーてんぶら合いそう
 4B : おひたしはぜんぜん(0.7)
 5A : おひたし合わないねえ
 6B : 合わなかったね
 7D : (...)合いませんか
 8C : ぬるぬる
 9C : ぬるぬる
 10B : おいしくなかったねえ
 11C : ぬるぬるする
 →12B : ぬるぬるしてるけどごわごわしてる
 ⇒13A : してるだけ うん

ここでBとAは夫婦であり、今食べているモロヘイヤのてんぶらがおいしいというCの発話(1行目)を聞いて、「てんぶらは合いそうだがお浸しには合わない」ということをCやDに向けて「かけ合い」といえる形式で主張する(2-6行目)。2人は互いの主張に同意し、またそこでは共通の体験を想起することも行われる。このようにして共通の知識が示されたあとで、Bが「ぬるぬるして」と発話した(12行目)ところでAは「してるだけ」と引き取っている。印象的なのは、「ぬるぬる」という同じ言葉をそれ以前に3回にわたってCが発話しており、「してるだけ」という引き取りはこれらのCの発話とも統語的に連続するのに、AはCの発話ではなくBの発話を引き取っていることである。ここには、このシーケンス環境の中で引き取りを行うにあたって、共有知識を持つ共同説明者という立場にAが指向していることがうかがえる。

このシーケンス環境は次のように定式化できる。

A : 「知識の表示」 - B : 「知識の共有の表示」
 ↑
 A : 引き取り

6 追加説明

最後に、なにごとかについて知っている者から知らない者へ説明が行われるとき、それが既に述べられたことへの「追加的な」説明という性格を帯びるような形にやりとりが組織される場合、その追加説明部分はしばしば説明の受け手によって引き取られる。このシーケンス環境における引き取りは、ほとんどの場合シェグロフらが「試し標識(try marker)」と呼ぶ上向調の抑揚や質問形式の発話デザインを伴う [Schegloff et.al. 1990]。

第一に、説明の受け手がヘリテイジのいう「状態変化標識」を用いて反応したあとで、さらに行われる説明は、説明者が自発的に行う追加説明という性格を帯びる。

【出てくると泣きだしちゃうん (SK)】

1B : んーでもだいぶかかったよ(.)最「近やっただもん(.)慣れ」たの
 2A : 「かかったー?」あーそう
 → 3B : うん(0.5)最初ー(.)かえっ(0.7)送ってってー
 4A : うん(0.9)
 ⇒ 5A : 出てくると「泣きだしちゃうん?」ふーん
 6B : 「出てくるとき必ず泣いたからねー」

Bは自分の子どもがなかなか保育園に慣れなくて苦労したということを、Aに説明している。Bの1行目の発話を聞いたAは「あー」と状態変化標識を用いて反応している(2行目)。このあとで、さらにBが「最初ー、かえっ、送ってってー」と発話するとき(3行目)、Aは「Bの子供が保育園に慣れるのにだいぶかかり、最近やっど慣れた」という既に自分が理解を主張した知識への付け足しとしてBの説明を聞くことができる。そして、Bが説明しようとしているのは「慣れるまでの最初の時期のこと」であることが観察可能である。

第二に、説明の受け手が先行する説明を受けて質問をするとき、その質問が修復の開始ではないなら、続いてなされる説明は、質問によって要請され方向づけられた追加説明という性格を帯びる。

【戻るにしる (Y1)】

1B : あっ(.)そうだから(0.4)山梨ー?(.)はー(1.0)静岡と(.)直線距離でいったら
 2 ほんっそんなに変わらないでしょほとんど
 3C : うんうん
 4B : うちのー北だし
 5A : うん
 6B : でもー(0.5)着くのににはー(.)うん時間と違うんやんかあ(0.9)
 7B : 「わかるー?」

- 8A : しどっ
 9A : どっから乗り換えるの?
 10B : ー [だから(0.8)えーとねえ(0.4)名古屋で乗り換えるにしっしろー
 11A : んー
 →12B : 東京まで出てー(0.6)東京から戻るに [しろ?
 ⇒13A : ー [戻るにしろ(0.9)
 14B : うん(0.5)すごい時間かかんねん

静岡に実家のあるBは、関西の大学の同級生であるAやCに向かって、関西から静岡と山梨への電車の便がいかに異なるかを説明している。Bが「山梨は静岡と直線距離でいったらそんなに変わらないのに着くのはうん時間と違う」ということを説明すると(1-6行目)、Aは「どっから乗り換えるの?」と質問する(9行目)。この質問は、「乗り換え」というBの説明で明示されていないが含意されている要素に焦点を当てることで、そこまでを理解したことを「立証」しているとともに、続いてBが行うべき説明を方向づけている。これに答えてBが「名古屋で乗り換えるにしろ」と追加説明を始めるとき(10行目)、「～にしろ」という発話デザインは、「乗り換え」の選択肢がもう一つあり、そのもう一つを述べたときにこの発話が完了しうることを観察可能にする。つまり、典型的な複合的ターン構成単位の準備要素を構成する。Bは「東京まで出てー」といって沈黙を挟むが、この地点ではまだ乗り換え駅が東京の先にもう一つあるのか、東京が最後の乗り換え駅なのかは分からない(12行目)。Aが引き取りを行うのは「東京から」という東京が最後の乗り換え駅であることが示された後である(13行目)。このことは、自分の質問によって方向づけられたものというBの追加説明の性格にAが指向していることを示している。

第三に、説明が「追加的」説明であることを説明者自身が示す場合も引き取りの対象となる。

【刺さってないかどうか(JM)】

- 1A : ただ何 蜂 [に 刺 さ れ たか が ー わ [かりゃあねえ
 2B : ー [ふつー そやったら そうそう [雀蜂とかね でっかい蜂やっ
 3 ー [たらちょっとショック起こしたりすることがあるから

[12行省略: この付近で雀蜂は見たことがないから足長蜂などではないか、という推測をAが話す]

- 16B : まそやったらー心配ないです(わ) [痛みだけ [(でも)おさえてやったら
 17A : ー [す [ー [雀蜂 雀蜂やったらねー刺された
 18 ー [らかなりもうそれだけでもねー

[14行省略: 雀蜂に刺されたらどれだけひどいかという推測をAが話す]

- 33A : その子供がねー
 34B : うん
 35A : そんな普通歩いて帰ってこれるーような痛さやっ(0.7)ではちょっとないでしょ
 →36B : うん(0.7)あとねえ(.)あー(0.6)針がー
 ⇒37A : 刺さってないかどうかですか?

38B: うん残ってるー(0.4)こうグッとこうかっ(.)釘(.)鍵状になってるからー

39A: ああ

ある学童保育施設が行ったキャンプで、ハイキングに出かけた子供が蜂に刺されたという連絡が、本部テントで待機していた指導員Aの携帯電話に届いた。Aは必要な指示を他の指導員に出した後、医師である保護者B(別の子供の父親)に相談をする。Bは相談に応じて、2-3行目や17-18行目でどんな症状が予想されるかを説明する。このあと36行目で、それまでの説明に出ていなかった新しい論点(蜂の針が残っている可能性)の説明を開始するとき、Bは「あとねえ」という言葉で、それが「追加的」な説明であることを示している。この発話デザインによって、Bは先に説明した論点についてはもうAが理解しているという自分の了解を示している。この説明をAは「刺さってないかどうかですか?」と質問形式で引き取っている。

以上のような「追加説明」のシーケンス環境は次のように定式化できる。

B: 「説明」 — A: 「理解の表示」 — B: 「追加説明」

↑

A: 引き取り

7 アクセスの「現在完了」性

以上に見た引き取りの生じるシーケンス環境は、その中で引き取り手が占めている相互行為上の立場に着目すると、大きく3種に大別できる。第一に、引き取り手が「知る者」という立場を占めている場合として「理解の表示・チェック」がある。ここで引き取り手は、自分が物語りやニュース告知などの形で何ごとかを相手に知らせる活動に参加している。第二に、引き取り手が「知らない者」という立場を占めている場合として「追加説明」がある。ここでは上の場合と反対に、相手の方が引き取り手に説明活動を行っている。第三に、引き取り手が「共に知る者」という立場を占めている場合として「共同追加想起の促し」「現場コメント」「共通経験報告」「共同説明」がある。これらの場合、引き取り手は相手の発話を通じてはじめて何ごとかを知るのでなく、それとは独立に自分がそれを知りうる立場にある。

これら3種類の相互行為上の立場において、いずれの場合も引き取りというふるまいが利用されるということは、引き取りを「一つの単位を二人で作る」といった共同話者性(co-tellership)の現象として捉えることに再考を促す。サックスが当初注目した新参者に共同で誘いかけるという活動や、ラーナー&高木が詳しく論じた共同説明という活動においては、確かに複数の参加者がともに「一つのパーティ」としてふるまいつつ、第3者に発話を向けるという形式を持つ。しかしながら、「理解の表示・チェック」や「追加説明」などのシーケンス環境はこれとは明白に異なるものである。

では、このような異なる立場から引き取りが行われるとすれば、それらがいずれも引き取りという共通の形式でなされることはどう考えたらいいのか。以上の引き取りのシーケンス環境には、何か共通性があるだろうか。

一つははっきりしていることがある。引き取りを行う聞き手は、あいづちを打って「自分が引き続き聞き手であり続けることを示す」ことをしていないということである。引き取りとは聞き手であることをやめる手続きの一種である。さて一般に、聞き手であることを

やめる手続きは、やめる以前の「聞いていた状態」に対する何らかのアカウントを構成していると考えることができる。

では、引き取りは聞いていた状態へのアカウントとしてどのような特徴を持つだろうか。それは第一に、「相手の発話によってもたらされうる知識に自分がアクセスした」ことを示しているといえよう。統語的連続性というリソースは、まさに文という統語的単位がひとまとまりの思考ないしメッセージの乗り物だと見なされているがゆえに、このようなことを示すための強力な慣習的仕掛けとして利用可能である。

しかし第二に、それは「相手の今の発話によって自分がそのアクセス状態へと移行したのではない」ことも示していると考えられる。ヘリテイジは、発話者がある知識にアクセスしていない状態からアクセスした状態へと変化したことを知らせる標識を「状態変化標識」と呼んだ〔Heritage 1984〕。日本語の場合「あ」がこの働きをすると考えられる。「あ」が用いられるならば、発話者はアクセスした状態へと「今」移行したものと聞くことができる。それは、アクセスの「今」性を示す手続きである。しかし、引き取りが行われるのはこのような状態変化が生じていない場合だと考えられる。引き取りに状態変化標識が先立つことはないからである⁹⁾。

上で見てきた引き取りのシーケンス環境は、相手の発話が「それまで自分がアクセスしていなかった新奇な知識にアクセスする機会を与えた」というものではないことを、引き取り手が適切に主張しうる環境であるという共通性がある。「理解の表示・チェック」の場合、そこで理解されている知識は引き取り手の方が先にアクセスを表明していることである。「共同追加想起の促し」「現場コメント」「共通経験報告」「共同説明」の場合、引き取り手は引き取られ手と共に、あるいは独立に、その知識にアクセス可能であることが示されている。「追加説明」の場合、引き取り手は「知らない者」という立場を占めながら、説明の追加的構成によって、その発話で説明されることを自分がすでに予期しうる立場にあったことを主張できる。

以上から、引き取りという手続きが共通に持つ働きとして次のような仮説を提出することができると思われる。

(仮説1) 引き取りとは、相手の発話によってもたらされようとしている知識に、その発話とは独立に自分がすでにアクセスしていることを示すために利用可能な手続きである。それは自分のアクセスの「現在完了」性を示すために利用可能な手続きである。

この仮説は「誰が引き取りを行いうるか」という問題に対する一つの解答を与えるものである。すなわち、引き取りを行いうる者とは、相手の発話によってもたらされようとしている知識に自分がアクセス可能であることを、それに先立つシーケンス環境において表示・主張した者であると考えられる。

V 例外ケースの分析

手元のデータ群の中には、以上の整理が直接には当てはまらないケースもいくつかある。それらのうちの二つをここで見ておきたい¹⁰⁾。これらのケースでは、以上の整理が直接的には当てはまらないものの、相互行為が組織されているやり方や発話のデザインにおいて、仮説1に示されたような引き取りの働きへの参与者の指向が示されていると考えられる。

1 助け船

第一は、私が別の機会に「助け船」と呼んだ形式の一変種である [岸田 1999]。

【なんとか法に (Y S)】

1A: えー日本であんなことしないよねー(0.4)

2C: しないよ(2.3)

3B: なんか(.)火器ー(.)じゃない(.)あーいうとこで火い使うとー(1.3)

→ 4 あれじゃない?(0.5)あれしょー消火ー ┌ なんとら法にー 引っかかる
└ なんとか法に うん

⇒ 5A:

6A: 引っかかるんかな

3人はヘビイメタルロック音楽のコンサートをテレビで見ながら会話している。テレビの中では、ステージ上で火を燃やす演出が行われており、そのような演出は日本では行われないということが話題となっている(1-2行目)。Bは日本でそのようなことをするとある法律に引っかかるということを言おうとして、その法律の名前が出てずに「言葉探し」をする(3-4行目)。Bはまず「火器ー」と言いかけてそれを中絶し、「じゃない」と自らその誤りをマークする(修復の自己開始)。続いてBは、自分で修復を実行し始めるといよりも、言葉探しを聴き手が援助することが可能になるような形に発話をデザインする(外部探索)。「あーいうとこで火い使うとー」という部分は、複合的ターン構成単位の準備要素をなしており、このような形式で言葉探しをすることで、Bは探している言葉が最終要素の位置に来ることを聴き手に対して予測可能にする。さらにこのあと、1.3秒というやや長い沈黙をはさむことで、Bは聴き手が言葉を補うためのスペースを与える。しかしそれでも、聴き手は何も発話しないため、今度は明示的に「あれじゃない?」と質問形式で聴き手の援助を求める(助け船の追求)。

ここまで明示的に聴き手の援助を要請したあとで、さらに聴き手が何も発話しないとき、一つのことが公然化される。つまり、聴き手はここでBが「助け船を求めている」ことを捉え損なっているのではなく、Bが探している言葉そのものを思いつけないということである。ここにいたって、聴き手の援助を当てにしていたBは作戦の変更を余儀なくされる。Bは「あれしょー消化ー」と依然として不確かさを示しながら、自ら修復実行の最終段階に入っていく。

さて、この引き取り直前までの時点で、AはBが発話しようとしていることにアクセスしていないことが明らかである。この意味で、このケースは仮説1に表面的には反している。しかしながら、以上のシークエンス環境は、これまで見てきたさまざまな引き取りケースとは大きな違いがあることに注意すべきである。これまで見てきたケースにおいて、引き取りは「許容された」ふるまいではあっても「要請された」ふるまいではない。これに対し、このケースの場合、Aは明示的に助けを求められており、それを果たせなかったことによってBの発話の進行性の滞りにある種の連帯責任を帯びている。

Bが「火器ー」という音の引き延ばして始めた言葉探しの試みの果てに、再び酷似した「消化ー」という音の引き延ばしを行うとき、いわば事態は一步も進んでおらず振り出しに戻っている。ここでAが引き取っていった「なんとか法に」という言葉は、きわめて特殊な言葉である。それは、探している法律の名称が自分にも分からないことを明示することで、もはやその名称を探し出すことなしに発話を先を進めることをBに対して提案しているといえる。つまりAは、「火器ー」から始まった言葉探しの試みが自分にも連帯責任

のある形で挫折したために、「消化ー」で始まった第2ラウンドを別の戦略で乗り切ることにしたのである。すなわち、言葉を探すのではなく、言葉を探し当てなくてもいいという提案を行うという戦略である。

要するにこの引き取りは、Aが実際にはBが発話しようとしていることにアクセスしていないにもかかわらず、アクセスしているのと同じ相互行為上の効果(=Bへの助け船)を生み出すものなのである。

2 チャンネルの非接続

第二は、引き取り手と引き取られ手が直前まで会話のチャンネルを接続していない場合である。この場合には、興味深いことに、引き取りの前に「うん」という標識が前置きされている。

【うん回りが言うほど嫌いじゃない(HO)】

- 1C: あのおしることかあんなやつみたいな感じ?(0.6)
 2B: そーですそーです(0.5)
 3C: ほーお(1.4)でそれを私は好きだと(1.0)
 → 4B: 好きではないけどまあ(0.3)
 ⇒ 5A: うん(0.4)回りが言うほど嫌いじゃない
 6B: 嫌いじゃー
 7C: ー
 ┌ ないと
 └ ふーん

Bがキャンパス内の自動販売機で売っている「缶入りお粥」のことを話題にしたのを受けて、それを見たことがないCはBに質問している(1, 3行目)。Bが自分が缶入りお粥の味を好きかどうかを説明し始めると(4行目)、その説明を向けられた相手ではないAが「うん、周りが言うほど嫌いじゃない」とBの説明を引き取っている(5行目)。このケースは、二つの意味で先の整理に当てはまらない。第一に、ここで引き取っているAは説明を受けている相手ではなく、このひとつづきのシーケンスにおいては「2人のやりとりの傍観者」と呼べる立場にある。第二に、Aは4行目の発話でBが言おうとしていることに自分がアクセス可能であることを、先行部分で示していない。

【うんきせ(SK)】

- 1C: Yく
 2D: ー
 3A: ー
 4Y: ー
 5C: ー
 6B: ー
 7A: ー
 8C: ー
 → 9B: ちょうどえんどうえんどう豆のねー
 ⇒ 10A: ー
 11 ー
- ┌ すごいねー(.)お豆食べたの?ここで
 └ あーっはっは
 ┌ おいしかったねー
 └ おま
 ┌ そーだったの?
 └ そーだねー
 ┌ じゃこも食べたねー
 └ あーらー
 ┌ 出始めてねー
 └ うん
 ┌ うんきせ(.)そうそう
 └ そうー番おいしいとき

2歳の幼児であるYが、以前この祖父母の家に来たとき豆を食べたのを覚えていることがさきほど分かり、来客であるCはこの出来事を受けて「すごいねー」とYをほめる(1行目)。続いて、母親であるAは「おいしかったねー」「じゃこも食べたねー」とYに話しかける(3, 7行目)。この様子を端から見ていて「そーだねー」(6行目)と応じていた祖父のBが「ちょうどえんどうえんどう豆のねー」とそのときの様子を思い起こして発話し始めると(9行目)、Aは「うんきせ(つ)」と引き取る(10行目)。

このケースは一見したところ共同想起と似ている。しかし、Bの発話に先立つ部分で、Aは自分が想起したことをBに知らせているのではなく、自分の子供のYに語りかけているのである。この語りかけに対してBは傍観者という立場にある。Bの発話は内容的には今までAが想起していたことへの追加であるとしても、シーケンス形式としてはそれは追加想起ではない。Bの発話は、それ自体が新しいシーケンスを開始しているのである。

以上のように、チャンネルが接続していない状態から引き取りが行われるとき、その前に「うん」がつけられることは何を意味するのだろうか。前章で見えてきたケースではいずれも、引き取りに先立つひと続きのシーケンス環境の中で、引き取り手のアクセス可能性が表示・主張されていた。この先行する表示・主張と引き取りとのシーケンス上の連続性に引き取り手が指向しているとするならば、そのような連続性なしに引き取りが行われる場合、何らかの補完的手続きが必要となるはずである。チャンネル非接続状態からの引き取りにおける「うん」は、この補完的手続きではないかと考えられる。「うん」と受け手としてふるまうことによって、自分は相手の発話を聞いていたということが回顧的に公然化される。これによって、先立つ部分で自分または相手が傍観者であるあいだに生じたやりとりが、いまやチャンネルの接続した「十全たる参与者」たる二人のやりとりを進めるために利用可能なものとなるのだと思われる。

VI 小 括

ラーナーが「半透過性」という言葉で表現したように、統語的単位は実際の会話の中でさまざまな契機によって聞き手の参与に対して開かれた性格を帯びることがある。この意味で、言葉が引き受ける統語的構造化は、単に話し手の意図の伝達のためにのみ存在するのではない。むしろそれは、やりとりの中で「許容されうるもの」を知るための道具として利用され、かくして会話への参与を組織化するための道具ともなるのである。コミュニケーションの中におかれた統語的単位は、こうして、いくつかの契機の複合的作用によってさまざまに異なった開放性を帯びるのである。

統語的単位が開放性を帯びる第一の契機は、ラーナーが複合的ターン構成単位という形で取り出したような、統語的単位それ自体の構造である。第二の契機は、ラーナーが進行性の滞りと呼んだ発話産出上の諸特徴である。本稿で見えてきたのはまず、これら二つの契機に加えて第三に、当該発話がおかれているシーケンス環境と位置によって、その発話の持つ開放性が異なってくるということである。しかしこれは、単に3つ目の契機を並列的に付加しただけではない。より重要なことは、第一に、発話がその開放性に関して引き受ける構造化は、その発話自身の内部構造として考えられるべきでなく、むしろそれが位置づけられたシーケンスの構造の中で考えるべきであるということである。第二に、進行性の滞りという契機も、発話それ自体だけでなくシーケンスにおける滞りとしてまずは考えるべきであり、一つのターン産出中の滞りとはその一つの現れだと考えることである。

このような契機によって、文＝発話という統語論的単位は、特定の聞き手に対して開放性を帯び、かくしてその者の引き取りという形での参与を「許容されうるもの」とする。しかしながら、「許容されうるもの」が実際に許容されるのかそれとも拒否されるのかは、依然として交渉の余地のあることである。引き取り手がそのふるまいによって「アクセスの現在完了性」を示したあとで、この示されたアクセスは相手に承認されるのか拒否されるのか。これが次の分析課題となる。

[トランスクリプトで用いた記号]

- (文字) : 聞き取りに確信が持てない部分
 (……) : 聞き取れない部分
 (数字) : 沈黙の秒数。ごく短い沈黙は(.)で示す。
 [: 同時発話の開始位置
 文字h : 笑いながら発話された言葉
 hh : 吸気音
 ? : 直前部分の末尾が上昇調の韻律
 = : 行末から行頭への切れ目ない連続
 [文字] : 分析者による注釈

注

- 以下で「本研究」という場合、本稿と続稿「統語的単位の開放性と参与の組織化(2)ー引き取りにおける参与の交渉ー」『大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門』第51巻第1号掲載予定)の両方を指している。
- 「占有物」ということには、二重の意味がある。第一に、発話と文を同一視する場合、発話者は文＝発話を組み立てるための時間スペースをいつも「占有」できる存在であることが前提とされる。第二に、大澤の言い方を借りれば、言語行為論は文＝発話の意味が了解されるときその意味が帰属される「先験的な審級」を、話し手の内面に「意図」という形で実体化している〔大澤 1994〕。この指摘はグライスにも関連性理論にも当てはまるが、このような実体化とは、言い換えれば、発話の意味が話し手に「占有」されたものと見なされるということである。デリダは、第二の意味で「占有」がなされていないケース(演劇のセリフ、朗読など)を言語行為論が「派生的なもの」と見なしたことを批判したが、同様に、第一の意味で「占有」がなされていないケース(統語的に完結していない発話、他者の発言に遮られた発話など)を「派生的」と見なすことも批判されてはいはずである。
- 能川の議論を踏まえるなら、関連性理論はより柔軟な対応が可能であるかもしれない。その理由は、伝達を「ある明確なメッセージが同定される過程」と考える言語行為論やグライスの理論と異なり、関連性理論は想定「集合」が顕在化される過程として伝達を考えているからである。つまり聞き手の推論としては、「話者が意図した想定にたどり着くこと」から自分の「深読み」を経て「もはや発言解釈ではない聞き手独自の情報処理」に至るまでの連続的な段階のすべてが理論的射程に入るのである〔能川 1993〕。このように理解された場合、関連性理論は「許容されうること」をかなり視野に取り込める。しかし、「許容されうること」が推論における文脈拡張の末に認知されるとすれば、関連性理論の立場からは処理労力からいって到達されにくいものになるだろう。これは、日常会話において瞬時のタイミングで行われる多様な「先行発話の利用」の実態とはかけ離れていると思われる。この点では、推論モデルの立場に立ちつつも自然的意味と非自然的意味を連続的に捉え、発話を「徴候」と見なすことを提案している高梨のやり方の方

- が可能性を持っていると思われる [高梨 1999]。
- 4) ゴフマンが「フレームリミット」という概念で捉えようとしたことの一部は、このような問題だったと考えられる [Goffman 1974]。
 - 5) もちろん、「コンテキストの接ぎ木」の可能性という観点からは、先行発話との統語的連続性に視野を限定する必要はない。先行発話中の言葉を一部反復したり言い換えたりする多様な発話が視野に入る。しかし、これらについては、統語的単位の開放性という主題の中ではなく、むしろトピック的に連続した発話連鎖の形成というような別の主題の中で探究される必要がある。この点については、別の機会に一定の分析を試みた [串田1997a]。
 - 6) 本研究で分析するのは、以下の12の場面から収集した約80の引き取りケースである。
 - Y I. 女子大学生3人の下宿での会話
 - S K. 親族6人の食事場面
 - Y S. 女子大学生3人の下宿での会話
 - S T. 恋人男女2人の下宿での会話
 - K S. 女子大学生3人の下宿での会話
 - H O. 男子学生3人のゼミ室での会話
 - T H. 女子学生8人のゼミ室での会話
 - H Y. 男子学生2人と女子学生1人の大学食堂での会話
 - S C. 学童保育施設の指導員会議(6人)
 - M E. 学童保育施設での子どもと指導員の会話(4人から11人のあいだを変動)
 - J M. 野外活動施設のテント前での会話(11人が交替で登場)
 - A M. 女子学生3人のゼミ室での会話
 - 7) 現在行われている高品質な対話コーパスを作成するプロジェクトは、このような研究方向にとっては大きな可能性を持つ [人工知能学会談話・対話研究におけるコーパス利用グループ 2000]。
 - 8) ラーナー自身もシーケンス環境を考慮に入れる必要性を論じているので、本稿の記述はラーナーへの批判というよりはむしろ、彼自身が十分に行っていない作業を補足するものである。
 - 9) この点で興味深いのは、引き取りと状態変化標識の使い分けである。先に挙げた【出てくるとき】に見られるような「状態変化標識-引き取られる発話-引き取り」という形式はいくつかのケースにおいてみられる使い分けである。このパターンでは、引き取りの対象となる発話より以前の時点で「アクセスした状態への移行」が生じていることが明確に示されている。
 - 10) ここで取り上げる例外ケース以外で、以上の整理にはうまく当てはまらないケースが少数見られたが、それらはいずれも「最後のアイテム」の引き取りである。ここから考えられるのは、ターン構成単位の中でも最後のアイテムは「開放性」が高くなりやすい特別な場所だということである。二つの性質がこのことに関与していると思われる。第一に、最後のアイテムは「移行適切場の始まり」と考えられ、話者交替がレリヴァントでありうる。第二に、最後のアイテムはきわめて高い予測可能性を有するため、多くの場合に話し手の「占有」の程度が低くなることである(統稿における「著者性の緩み」についての議論を参照のこと)。言語によって最後のアイテムに来やすい品詞の種類は異なるから、人はどの言語共同体に属するかによって「占有しやすい」品詞と「占有しにくい」品詞が異なることが考えられる。バンヴェニストが言うように人間は「話す主体」である限りで「主体」となりうるのだとすれば、このような違いは言語共同体ごとの「主体」のあり方の違いに関わる可能性がある [バンヴェニスト 1983]。

参考文献

- C. Antaki, F. Diaz & A. F. Collins 1996, "Keeping your footing: Conversational completion in three-part sequences," *Journal of Pragmatics* 25: 151-171.
- M. バフテン 1988, 「ことばのジャンル」『ことば 対話 テキスト』新時代社。
- J. デリダ 1988, 「署名, 出来事, コンテキスト」『現代思想』16-6.
- F. Diaz, C. Antaki & A. F. Collins 1996, "Using completion to formulate a statement collectively," *Journal of Pragmatics* 26: 525-542.

- E. Goffman 1981, *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press.
- E. Goffman 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Row.
- C. Goodwin 1984, "Notes on Story Structure and the Organization of Participation," J.M. Atkinson & J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press.
- C. Goodwin 1986, "Audience Diversity, Participation and Interpretation," *Text* 6:3.
- M. H. Goodwin, 1990, *He-said-She-Said: Talk as Social Organization among Black Children*, Indiana University Press.
- P. グライス 1998, 『論理と会話』勁草書房.
- 橋元良明 1995, 「言語行為の構造」井上, 上野, 大澤, 見田, 吉見編『他者・関係・コミュニケーション』岩波書店.
- M. Hayashi 1997, "Where Grammar and Interaction Meet: A Study of Co-Participant Completion in Japanese Conversation," *Paper presented at Ethnomethodology and Conversation Analysis: East and West*, Waseda University.
- J. Heritage 1984, "A change-of-state token and aspects of its sequential placement," J.M. Atkinson & J. Heritage op.cit.
- D. Holmes 1984, "Explicit-Implicit Address," *Journal of Pragmatics* 8: 311-320.
- G. Jefferson 1973, "A case of precision timing in ordinary conversation: Overlapped tag-positioned address terms in closing sequences," *Semiotica* 9:1: 47-96.
- G. Jefferson 1984, "On stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters," in J.M. Atkinson & J. Heritage op.cit.
- G. Jefferson 1993, "Caveat Speaker: Preliminary Notes on Recipient Topic-Shift Implicature," *Research on Language and Social Interaction*, 26-1.
- G. Jefferson 1978, "Sequential Aspects of Storytelling in Conversation," J. Schenkein (ed) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic Press.
- 人工知能学会談話・対話研究におけるコーパス利用研究グループ 2000, 「様々な応用研究に向けた談話タグ付き音声対話コーパス」『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-9903-4.
- 串田秀也 1997a, 「会話のトピックはいかにしてつくられていくか」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社.
- 串田秀也 1997b, 「ユニゾンにおける伝達と交感：会話における「著作権」の記述をめざして」谷泰編, 前掲書.
- 串田秀也 1999, 「助け船とお節介：会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井・山田・西阪編『会話分析への招待』世界思想社.
- 串田秀也 2001, 「私はー私は連鎖：経験の「分かち合い」と共ー成員性の可視化」『社会学評論』52-2.
- G. Lerner 1989, "Notes on Overlap Management in Conversation: The Case of Delayed Completion," *Western Journal of Speech Communication* 53: 167-177.
- G. Lerner 1991, "On the syntax of sentence-in-progress," *Language in Society* 20: 441-458.
- G. Lerner 1996, "On the 'semi-permeable' character of grammatical units in conversation: Conditional entry into the turn space of another participant," E. Ochs, E. A. Schegloff & S. A. Thompson (eds.) *Interaction and Grammar*, Cambridge University Press.
- G. Lerner & T. Takagi 1999, "On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: A co-investigation of English and Japanese grammatical practices," *Journal of Pragmatics* 31: 49-35.

- S.C.Levinson 1988, "Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman's Concepts of Participation," P.Drew & A.Wooton(eds) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Polity Press.
- 水谷信子 1995, 「日本人とディベート—「共話」と対話—」『日本語学』14.
- 水谷信子 1993, 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12.
- 西阪仰 2001, 『心と行為』岩波書店.
- 能川元一 1993, 「有意性理論における「合理的対話者」」『年報人間科学』14.
- 大澤真幸 1994, 『意味と他者性』勁草書房.
- J.L.オースティン 1978, 『言語と行為』大修館書店.
- A.Pomeranz 1984, "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes," J.M.Atkinson & J.Heritage op.cit.
- H.Sacks 1992, *Lectures on Conversation*, 2 vols., Blackwell.
- H.Sacks, E.A.Schegloff & G.Jefferson 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language* 50.
- E.A.Schegloff 1972, "Notes on a Conversational Practice: Formulating Place" D.Sudnow(ed) *Studies in Social Interaction*, The Free Press.
- E.A.Schegloff 1987, "Recycled Turn Beginnings: A Precise Repair Mechanism in Conversation's Turn-Taking Organization," G.Button & J.R.E.Lee(eds.) *Talk and Social Organization*, Multilingual Matters.
- E.A.Schegloff, G.Jefferson & H.Sacks 1990, "The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation," G.Psathas(ed) *Interaction Competence*.
- J.R.サール 1986, 『言語行為』勁草書房.
- D.スベルベル & D.ウイelson 1993 『関連性理論』研究社出版.
- 高梨克也 1999, 「発話理解の推論モデルにとって発話行為論とは何か」『話用論研究』創刊号.
- E.パンヴェニスト 1983, 『一般言語学の諸問題』みすず書房.

The Semi-Permeability of Syntactic Units and the Organization of Participation(1)

— Sequential Environments of Collaborative Utterances —

KUSHIDA Shuya

*Course of Social Studies, Department of Education,
Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582-8582, Japan*

Based on previous works by conversation analysts such as G.Lerner who has shown the production of a syntactic unit is an interactional achievement, this article describes typical sequential environments of collaborative utterances.

In analyzing Japanese conversational data, six sequential environments are shown to be the typical locations where collaborative utterances are produced; 1)display of understanding or understanding check, 2)joint additional remembering, 3)commentary on the present occasion, 4)series of self-report, 5)joint explaining and 6)additional explaining. It is also shown that in these sequential environments co-

participants pre-display or pre-claim that they are accessible to utterances that are subsequently co-produced.

Key Words: conversation analysis, pragmatics, collaborative utterance, participation